

縁側のある風景

木村 敏美

膝が悪くなつて自宅から行ける範囲で三十分程の散歩をするようになった。六十年前、博多区麦野地区に福岡市から分譲住宅が売り出された。六十坪程の土地に、建坪が二十坪、和室三間の縁側付き木造平屋住宅。主人が高校生の時父親が買い、移り住んだ頃、周りは田んぼで遠くに西鉄電車が走っているのが見えたという。

結婚と同時に他県への勤務となり父母とは離れたが、父は川釣りの道で取ってきた山桃や藪椿の木を庭に植え、小さな池を作つて鯉を育てた。里帰りした時はこの池で孫達とよく遊んでくれ、その様子を縁側から見て皆で楽しんだ。夜は縁側に腰かけ、線香花火をした事も忘れられない。

陽だまりの縁側で近所の友人と趣味の囲碁を楽しむ父や、庭を見ながら友とよくお茶をしていた母の姿が今も目に浮かぶ。街の一般的な住宅地での縁側付き合いは、玄関から入らない気軽さの中に節度もあり奥が深い。

又、以前農家の庭先での餅つきに参加したが、広い庭と縁側付きの家は、仕事場でもあり交流の場でもあると思つた。

三十年後再び福岡勤務となり、父母の家を建て替え、健在だった母と同居した。一階の母の部屋と和室には縁側をつけ、母は近所の友と昔のように庭の花を見ながら、陽だまりの縁側でお茶をする事が十年程続き、月日は流れた。

気がつけば、周りは新しい住宅やマンションが広がり、庭は車庫に変わっていった。散歩するようになっていろいろな路地に入ってみると、近所では見られなくなった六十年前の分譲住宅が数軒、多少改築等しているものの昔のまま残っていて、タイムスリップしたようで、縁側での思い出が駆け巡る。

和室は作られなくなつてきているという現在、縁側や庭も消えていくのだろうか。和室に障子、縁側と雨戸。機能が求められる中、そこには無駄があるかもしれないが、何か大切なものがあるような気がしてならない。

そんな家の前を散歩していると「お茶でもどうぞ」の声が聞こえてきそうで、思わず覗きたくなる。